

会長就任挨拶

—セイダンの会長なんて

ガラじゃないんだけど—



澁谷 繁樹

セイダンと関係ができたのは、入来院貞子さんから襲われた、が理由になる。

新聞社の文化部のペイペイだったころ、貞子さんは新聞社によく出入りしていた。文化関連の催しでもしよっちゅう顔を合わせたけれど、知性は屹立、弁も立つブンカオバサンだなど、あまり近づかないようにしていた。だいたいにしてからが、公にしろ酒の席にしろ、いろいろ談義は苦手で、滔々たる教養の流れには溺れてしまう。

敬遠しているとナゼカ向こうから近づい

てくる。大学一年生時代のスキー小屋で、ウイスキーで酔っ払った四年生の素敵な女センパイから「シブチャン、もてようと思ったらね、無視するの、知らん顔してりやにじり寄ってくるんだから。それと、相手が団体の場合は、コンパなんかだけどね、一番さえないのに優しくするの。そうしたら、一番いい女が手に入るんだな、これが」と、教えてもらったのを思い出す。

そうそう逃げ回ってばかりもいられない。たまにはおつきあいするうちに、大学の先輩だと知れた。加えて、夫君も同じ大学、しかも同じ学部の大先輩だと判明した。

十五代沈壽官氏との出会いとよく似ている。鹿児島のレストラン、顔も知らないのに論争になり、表で決着をつけようと腰をあげかけたら、氏が「ところで、はんな、大学な、どこな」と聞いてきた。「ワセダ」「おいもじ

やが、学部は「セイケイ」「じゃつとなあ」。言い争いはどこかに行つて、今日は呑んど、オウ、となつてしまつた。

入来院夫妻との場合も、先輩後輩とわかつた途端、頭があがらなくなつた。セイダンを発刊したい、ついでにはアナタも会員にするから、とテイコサンから申し渡され、新聞記者としてひとつの雑誌に所属するわけにはいかない、取材は公平が原則だからと抵抗したのに、一顧だにされず、もう決めたの、と押し通されてしまつた。

桐野三郎会長逝去を受けての新会長選びも同じだつた。髪の毛がなくなつた六十五歳にもなつて、情けないといつたらありやしなけれど、大先輩のオマエがせいとの一言に、任でもないしガラでもない抗弁を口ごもつただけで、押し切られた。

知性は薄っぺら、人格頼りなく、覚悟もフ

ラフラ、でも、一つだけは自慢できる。大先輩をはじめ会員諸氏がいずれ劣らぬ宝石ぞろいで、会長がフワフワでも、なんの心配もない。

それにね、テイコサン、そもそもはアナタが原因なんですからね、アナタに襲われなきや新会長だつて、なかつたんですから。

